



北山 太樹：新手の微細藻類展示 - 滋賀県立琵琶湖博物館の場合 -

地球上至るところに居ながらなかなか関心を持ってもらえないのが藻類の辛いところである。6500万年前に絶滅している恐竜の学名をそらんじる小学生は沢山いても近所の川や池や貯水槽に棲んでいる小さな生き物のことを知っている小学生はそう多くない。博物館はこうした状況を常日頃憂えているわけだが、では博物館での藻類の待遇は良いのかというと、これが実は小学生の場合と大差がない。この国ではおそらく発掘されている以上に多くの恐竜を最奇りの博物館で見ることができるが、藻類の展示のある博物館は大変少ない。あっても入館者用のパンフレットに載らない程扱いが小さい。ことに微細な藻類にいたっては稀有といってもよいだろう。しかし、地球環境を考えるにせよ生物多様性を語るにせよ、博物館で取り上げるべきなのは本当は恐竜ではなくて藻類なのではないだろうか。そんなことを考えて企画を練っていたところ、思わぬ所でユニークで素敵な微細藻類の展示に遭遇した。ここで紹介して、博物館における藻類の可能性を探る本シリーズの助走としたい。

5月14日、筆者は館の展示施設施行調査の名目で滋賀県立琵琶湖博物館の展示を視察する機会に恵まれた。この館は10年という準備期間を経て1996年10月20日に満を持して開館した、できたてのほやほやだがすでに高い完成度を持つ博物館である。琵琶湖を素材にし、「湖と人間」という館の規模の割にかなり絞り込んだテーマを主軸に総合的な展示を展開することによって独自性を出しているのが特色である。特にC展示室「湖の環境と人々の暮らし」と題された円形フロアは、琵琶湖の生物相についての生態展示と民俗学的な展示を混在させて、湖における人間の生活環境を立体的に表現しており、圧巻である。

さて藻類であるが、淡水生物としてシャジク藻類の標本くらいはあるかも知れないというのが入館前の筆者の予想だったので、「ミクロの世界」というブースで微細藻類の展示に出くわした時はちょっと驚いた。入口に「一滴の琵琶湖の水の中には、目に見えない小さな生き物がたくさんすんでいます。この不思議なミクロの世界を探検してみましょう」とある。2m位の高さの暗室の通路に沿って7つの小展示があり、

琵琶湖にみられる代表的なプランクトンをいろいろな工夫を凝らして見せている。「植物プランクトン」と題されたコーナーの前に立ってみる。子供の頭の高さくらいのところに四角い窓があって、闇の中で何やらほんわり緑色に光るものがゆっくり回転しながら浮かんでいるが見える。クンショウモ（緑藻類）である（図1）。水底を表現するためか真下に小石が2個置かれている。シュールな絵のような不思議な雰囲気漂っている。手を伸ばしても触れない。数秒で別なものに変わる。黄色の粒が集まったものがやはり回転している。なんだか分からないので解説用の写真を見ると、シヌラ（シヌラ藻類）だと分かる（図2）。このほかにも、オオヒゲマワリ（緑藻類）、イケツノオビムシ（渦鞭毛藻類）、オビケイソウ（珪藻類）、アナベナ（藍藻類）など、多彩な藻類のラインナップとなっている。藻類を扱ったこのような手法の展示をこれまで筆者は見たことも聞いたこともなく、驚嘆させられた。

この展示について、琵琶湖博物館の研究員でこの展示の製作を担当した芳賀裕樹氏にお話をうかがった。藻類の映像は浮き上がって見えるけれど、この展示装置に使われている映像そのものは特殊なものではない。

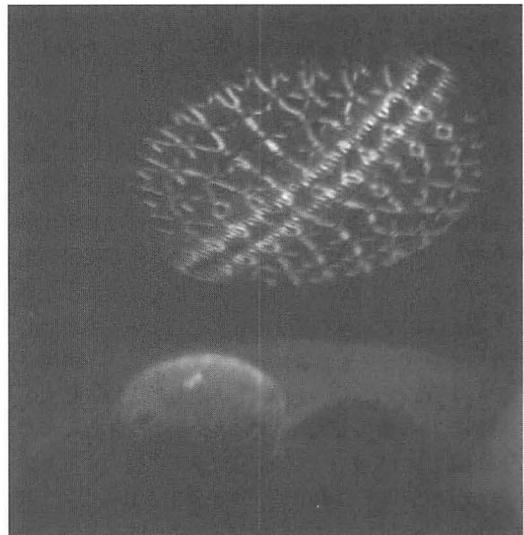


図1. 「植物プランクトン」展示のD-vision映像。クンショウモとオビケイソウが重なって見えている。

